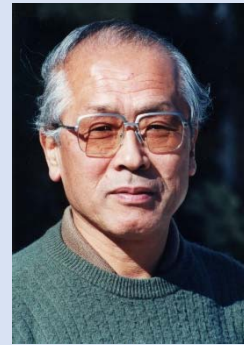


第 10 回米百俵賞受賞

(平成 18 年 6 月 15 日表彰)

後藤 文雄 (東京都武蔵野市)



カンボジアで教育を受けられない子どもたちを引き取り、教育を受けさせたほか、私費を投じて現地に学校を建設するなどの支援活動を行った。

■受賞時プロフィール

後藤氏は、昭和 4 年に長岡市に生まれる。昭和 20 年 8 月 1 日の長岡空襲で母や弟妹を失い、苦悩する。昭和 22 年に初めて上京し、上野の地下道に住みついている戦災孤児に出会ったとき、「このような子どもたちのために私は生き残ったのかもしれない。自分にも何かの使命が与えられている」と啓示を受ける。昭和 25 年、司祭になれば一生涯、他の人のために徹底的に奉仕できるからという理由で神学校に入学する。

昭和 55 年、タイ国境の難民キャンプへボランティアに行った知人から、ポル・ポト政権の虐殺、強制労働によって多く

の人が難民となったカンボジアの生々しい現場状況を知る。「何とかしなくては」と感じた氏は、翌昭和 56 年から難民の子どもたちを引き取り、里親となった。



▲カンボジアの学校で学ぶ子どもたち

当時、子どもたちはカンボジア情勢のため十分な教育を受けられず、心に傷を持っていた。そこで氏は日本の学校に入学させ、日本の文化・教育を子どもたちに施した。慣れない環境に戸惑い、「お前のような国を捨てた卑怯者は国へ帰れ」といじめを受けた子どもたちもいた。氏は学校に抗議し、授業で難民問題を取り上げるなど協力を得て困難を乗り越えたほか、カンボジア人としての誇りを忘れさせないため、子どもたちの間でカンボジア人のやり方をするのは認めた。こういった活動を平成6年まで続け、14人の子どもたちを育てた。

こうした活動を通じ、「教育支援こそがカンボジアの未来に希望をもたらす」と考えた氏は、平成6年から現地に学校の建設を開始。ポル・ポト政権により、十分な教育を受けず大人になった人間がほとんどのため、教育を施す先生がなく、政府は目もくれない状況だった。氏は自らの収入から建設費用を出し、平成17年まで12校を建てた。これにより、現地の人々に教育の重要性を認識させた。

■受賞後の活動

受賞後もカンボジアの農村貧困地域での小学校建設をはじめとする教育支援活動に取り組んでいる。平成27年現在、建設した小学校の数は累計19校を数えるまでになった。

また、既存小学校の補修、黒板の寄贈、教材や文具の配布なども行っている。さらに、洪水や干ばつなどの自然災害による生活困窮者への食糧援助、HIVをはじめとする病人や障害者家庭の児童への援助、貧困家庭への出産援助、ミシン寄贈による縫製での生計確保などに取り組んできた。

カンボジアでは、学校を卒業し医師や教師になった子も生まれている。

■主な受賞歴

○平成19年 第19回毎日国際交流賞



▲建設した小学校の子どもたち